

# 第52回 福岡県地方史研究協議大会

— 福史連創立50周年記念大会 —

## 世界遺産・沖ノ島

主催 福岡県教育委員会  
共催 福岡県地方史研究連絡協議会（福史連）  
期日 平成30年6月23日（土）  
会場 福岡県立図書館レクチャールーム（本館地下1階）  
日程

13:00 開 会

◆主催者あいさつ

◆福史連会長あいさつ

13:10 講 演 ①（40分）

古代宗像氏と沖ノ島祭祀

講 師 大高 広和 氏

13:50 講 演 ②（40分）

世界文化遺産「宗像大社」の歴史と由緒

講 師 葦津 幹之 氏

14:30 休 憩 （20分） 地方史フェア

14:50 講 演 ③（60分）

「神宿る島」宗像・沖ノ島と神社・古墳

講 師 西谷 正 氏

15:50 質疑・応答

16:00 閉 会

## 講師プロフィール

### ◎大高 広和（おおたか ひろかず）氏

現 職 福岡県文化振興課世界遺産室 宗像・沖ノ島遺産係 主任技師

専 門 日本古代史

研究テーマ 辺境および対外関係の歴史

主な論文 「沖ノ島研究の現在」『歴史評論』776号（2014年）

「七世紀における遣唐使の航海と沖ノ島祭祀の変遷」

『沖ノ島研究』第4号（2018年）

### ◎葦津 幹之（あしづ もとゆき）氏

現 職 宗像大社権宮司

経 歴 平成元年 宗像大社 奉職

平成15年 禰宜 就任

平成27年 権宮司 就任

### ◎西谷 正（にしに ただし）氏

現 職 海の道むなかた館長

専 門 東アジア考古学

研究テーマ 東アジア諸地域における古代国家形成史

主な著作 『古代北東アジアの中の日本』 梓書院（2010年）

『古代日本と朝鮮半島の交流史』 同成社（2014年）

『北東アジアの中の古墳文化』 梓書院（2017年）

## 古代宗像氏と沖ノ島祭祀

大高広和 (福岡県文化振興課世界遺産室)

### 1. 沖ノ島祭祀と宗像氏

沖ノ島の古代祭祀は、学術的には 4 世紀後半にヤマト王権の主導の下で行われるようになったと考えられている。同時期に築かれた東郷高塚古墳 (宗像市) は、突如として大型化した前方後円墳で、宗像地域の勢力、すなわち宗像氏が国家的祭祀に関与していたことを窺わせる。沖ノ島での祭祀は 9 世紀末頃に至るまで続いていたことが考古学的に証明されているが、宗像氏の首長墓は 5 世紀から 7 世紀まで福津市の津屋崎古墳群としてほぼ連続して確認でき、7 世紀後半以降は『日本書紀』『続日本紀』等、古代国家が編纂した史料群によって宗像氏の首長が連綿として続き、8 世紀の律令制下においては宗像郡の郡司 (大領) と宗像神社の「神主」とを兼任して宗像地域を政教両面で統治していたことが分かる。宗像郡は全国に八つしか無く西海道では唯一の「神郡」とされ、宗像氏一族による支配の独占が特別に認められていた。

『日本書紀』や『古事記』には宗像氏らが宗像三女神を祭っていると明記されている。また、宗像氏は 8 世紀には首長の代替わり毎に神への祭祀に供奉することを朝廷で奏上し、天皇から叙位 (外五位) と賜物が行われていたらしい (『続日本紀』天平元年 (729) 4 月乙丑条参照)。このことは、やはり意宇郡 (神郡) の郡司を兼任していた出雲国造が代替わりの際に朝廷で儀礼が行われていたことに類似しており、王権の宗像氏に対する扱いは、律令国家の段階においても出雲に比肩するところがあった。その理由は、やはり宗像氏が宗像三女神の奉祭氏族であったことが大きいだろう。

古代社会における氏族とは、擬制的な同族 (ウジ) 関係に基づいて首長に率いられた政治的集団であり、各氏族はウジナに基づいた職掌・役割で大王・王権に奉仕した。宗像氏の首長は「胸肩君」の氏姓をもち、7 世紀後半の天武朝においては「朝臣」姓を与えられているが、これは「ムナカタ」の地を治める、王権にとって重要 (=有力) な地方氏族であったことを意味している。

そして「ムナカタ」の地を治めることは、「ムナカタ」の神をまつることもあったのである。そもそも王権にとって地方の神を祭るとは、王権が祭るべき神やそれを祭るべき氏族を認定することにあつたとされる。例えば大神神社 (大物主神) であれば三輪君氏 (大田田根子が祖)、住吉大社 (表筒男神・中筒男神・底筒男神) であれば津守連氏 (祖は田裳見宿禰) が奉祭氏族である。沖ノ島へは直接王権によって使者が派遣されていたと考えられるが、勅使と地元の奉祭氏族である宗像氏との二重構造で祭祀は行われていたと考えられる。延暦 23 年 (804) 成立の『皇大神宮儀式帳』から伊勢の神宮祭祀の様子を見てみても、祢宜・内人・物忌といった地元の祭祀者が祭具・奉献品の準備や神饌の調理・供献を行う一方、朝廷からの幣帛などは勅使が捧げている。時代による変化もあるだろうが、基本的にはこのような構図をもって沖ノ島祭祀と宗像氏との関係を理解しておくべきだろう。

## 2. 宗像氏の支配領域と宗像大社

「ムナカタ」の語源は、海人が胸に刻んだ刺青という説もあるが、宗像の地に勝浦潟と釣川が形成していた二つの大きな旧入海（潟）に由来するものだろう。天然の良港となる大きな入海は、農業・手工業生産地である内陸部と沿岸部とをつなぐ役割を果たし、ムナカタの地の繁栄に寄与したと考えられる。また、『日本書紀』の神話で三女神が降臨したとされる「海北道中」という表現は、「ムナカタ」の海が朝鮮半島へとつながる海であることを示している。ムナカタの地（海）は、ヤマト方面から海路で博多湾沿岸部や朝鮮半島へ至るにあたっては必ず通過しなければならない、海上交通の要衝であった。

海との関わりなくして沖ノ島祭祀、宗像三女神、そして宗像氏を理解することはできない。多くの古墳が旧入海もしくは玄界灘を望んでいる津屋崎古墳群は、宗像氏と海との関係を象徴している。宗像大社についても、沖ノ島の沖津宮、大島の中津宮に加え、本土の辺津宮も『日本書紀』には「海浜」と記されるなど、旧入海に面し海との関係は深い。

ただし辺津宮は、宗像山（現在高宮祭場のある山）やそこから伸びた尾根が入海に突き出るような位置に境内が展開しており、海と陸との結節点としての意味合いをもっていることに注意したい。天元2年（979）2月14日付の太政官符（『類聚符宣抄』巻1）には、宗像神社での祭事に際しては「山海に臨みて漁獵を先と為し」ていたが、宗像三女神に菩薩の位が与えられた後は「長く獵山漁海の祠祀を停」めてきたと記されている。必ずしも珍しいことではないだろうが、ムナカタの地には海の幸・山の幸を神に捧げる生活文化や信仰の伝統が存在していたことが分かる。

ではそのムナカタの領域はどこまで広がっていたのだろうか。10世紀に成立した事典、『和名類聚抄』によれば、宗像郡は筑前国で最も多い14の郷からなり、これらの郷名には山田や荒自（在自）、野坂や深田など、現在も宗像・福津両市の地名として明確に残るものもある。席内郷は現在古賀市筵内として地名が残り、駅家（席打駅）は古賀市青柳に存在したと想定されている。さらには『万葉集』に宗像郡として見える名児山は、青柳の少し南、新宮町の三本松山（名子山）に比定でき、近世に「裏糟屋郡」とされた古賀市・新宮町域まで古代には宗像郡に属していたとみられる（図）。

そのほか、位置が不明な郷も少なくないが、私見によれば「大荒」「小荒」「津丸」はそれぞれ「大島」「小島」（＝地島）「津丸」の諸郷の誤りとみられる。さらに、「荒木」郷は宮若市（旧鞍手郡）の上有木・下有木付近である可能性があり、遠賀郡には位置不明ながら宗像郷が存在していた。これらは古墳時代の考古学的知見、中世史料から窺われる宗像大社（宗像大宮司家）の勢力範囲とも通底するところがあり、古代宗像氏の広大な勢力範囲を示しているようだ。

古代宗像氏・宗像郡の実像はまだまだ分からないことも多いが、沖ノ島および三女神への祭祀や朝鮮半島への海上交通などとの関わりによって、王権との強い関係をもった重要な氏族・地域であることは疑いない。宗像から世界遺産が生まれた今だからこそ、その重要性を解き明かすための研究を進めていかなくてはならない。

図 古代宗像郡の地形と範囲

(PCソフト「カシミール3D」により国土地理院基盤地図情報を利用して作成)



## 世界文化遺産「宗像大社」の歴史と由緒

宗像大社 権宮司 葦津幹之

日本人には自然の恵みにより生活出来ているという文化があります。また日本は地震や津波、台風など自然災害が多い国です。そのような場所に生活する日本人は古代より自然の恵みに感謝しつつも、自然に対し畏怖畏敬の念を持ちながら生きてきました。そこから出来た信仰が神道です。つまり神道の原点は自然崇拝で、誰が創ったとかでは無く自然発生的に生まれた信仰とされています。

現在の神社は社殿祭祀に移行していますが宗像大社は沖ノ島を始め辺津宮にある高宮祭場など、神道の原点である自然崇拝信仰が色濃く残る神社と言えます。

宗像神を祀る神社は全国に約 6,200 社あるいは 6,500 社とも言われ、広島県の安芸の宮島・厳島神社や神奈川県江ノ島神社などが代表する神社で、京都御所などにも祀られ、特に東北・関東に多く祀られています。



沖ノ島



高宮祭場

宗像神の誕生は古事記・日本書紀によると、天照大御神と弟のスサノオの尊による誓約（誓い）により誕生し、沖津宮・中津宮・辺津宮に鎮座されたことが記されています。



神勅

ご降臨された際に「汝三柱神、宜しく道中に降居して、天孫を助け奉り、天孫に祭かれよ」との神勅（天照大神から出された命令）があった事が日本書紀に記されております。

「道中」とは海外との通路であった筑紫の北の海の中、いわゆる玄界灘を指し、海北道中とも言われています。天照大御神は三女神が玄界灘に降臨して、この周辺海域の守護神になり、歴代の天皇の祭り事を助けると共に、歴代の天皇より丁重に祭られなさいとの意味が記されています。神勅がある神社は全国的にも希です。またこの神勅により歴代の皇室の皆様方が宗像大社にご参拝されており、平成 29 年 10 月には天皇皇后両陛下のご参拝も賜りました。

あわせて宗像の神は「道主貴」という称号をお持ちです。これは「すべての道を司る最高最貴の神様」という意味を示します。この「道」とは単に道路を示すのではなく道徳、道義や武道、茶道、華道など日本の伝統文化の奥義を意味する言葉でもあり、「道」とはその物事の規範となるものという意味があります。宗像の神様の信仰が今日まで継承された由縁もここにあります。

また「貴」とは「高貴な者」という意味があり、この尊称をいただく神様は伊勢の神宮に祀られる大日靈貴（天照大御神）と出雲大社のご祭神である大己貴（大国主神）と宗像大社の道主貴（宗像三女神）に限定されています。

宗像地域はその昔「神郡宗像」と呼ばれていました。神郡とは一郡全戸が神社に属し、貢物を神社の用に供するように定められた特別の郡で、大化の改新によって国郡制が成立した649年に神郡制度が成立し、九州では唯一、宗像が神郡に定められました。

筑前国宗像郡：宗像大社（福岡県）	伊勢国 <sup>わたらい</sup> 渡会郡、 <sup>たぎ</sup> 多気郡：伊勢神宮（三重県）
安房国安房郡：安房 <sup>あわ</sup> 神社（千葉県）	出雲国 <sup>おつ</sup> 意宇郡：熊野神社（島根県）
常陸 <sup>ひたち</sup> 国鹿嶋郡：鹿島神宮（茨城県）	下総 <sup>しもとうさ</sup> 国香取郡：香取神宮（千葉県）
紀伊国名草郡：日 <sup>ひのくま</sup> 前神社・ <sup>くにかかす</sup> 国懸神社（和歌山県）	

このように「神勅」を受けていたり、「道主貴」の称号を与えられたり、「神郡」に定められたりしたところを見ても、国として宗像大社がどれほど重要な神社であったかが伺えると思います。

その決定的な物証が沖ノ島から出土された8万点にも及ぶ神宝です。出土された神宝は朽ちずに残っているものだけであり、朽ちたものまで含めるとその数十倍のお供えがあったと推測されます。この沖ノ島には国内最大の祭祀遺跡があり、出土した神宝は沖ノ島祭祀用にわざわざ作られたと考えられるお供え物が多くあります。沖ノ島祭祀が国家の重儀であったことは明らかです。

現在、沖ノ島は宗像大社の神職が1名常駐しており、10日間交代で奉仕し島を守っています。沖ノ島で奉仕する神職は毎朝海に入って禊を行い、本殿にてお祭りをおこなっています。10日間交代と言っても、玄界灘は時化が多いため、時化になると船が出せないのが、現在でも決められたスケジュールで交代出来ることは殆どありません。

沖ノ島は女人禁制と言われますが、これは女性が行くには過酷すぎる場所で、このような危険なところには行かせられないという考えが、時代と共に沖ノ島に行ってはいけない信仰になったと言われています。世界遺産登録後は女性だけではなく、一般の上陸を厳しく制限する状態になっています。

この度の世界遺産登録は観光目的の世界遺産登録ではありません。先人が守り続けてきたこの貴重な文化伝統歴史を後世に繋ぐための手段であり、日本人が昔から育んできた自然崇拝信仰を世界の人々に知って頂くと共に、信仰を通じて自然環境の保全にも取り組めればと考えています。世界遺産登録を期に今後、宗像についての調査・研究を一層進める必要があると思います。

## 「神宿る島」宗像・沖ノ島と神社・古墳

西谷 正 (海の道むなかた館長)

### 沖ノ島の古代祭祀遺跡

九州本土から約 60km の玄界灘の真只中に浮かぶ絶海の孤島・沖ノ島の祭祀遺跡に対する学術的で本格的な発掘調査は、戦後の昭和 29 年(1954)から昭和 46 年までの間に、宗像神社(昭和 52 年に宗像大社と改称)復興期成会が主管し、九州考古学界があげて取り組んだ画期的な事業であった。その結果、のちの平成 28 年にイコモスの現地調査官をして、「古代祭祀の記録を保存する類い希なる宝庫」と絶賛させるほどのきわめて重要な成果をもたらした。

国宝に指定されている約 8 万点の<sup>ほうけんひん</sup>奉獻品を見ると、<sup>さいし</sup>祭祀は 4 世紀後半から 9 世紀末までの約 500 年間にわたって<sup>さいこう</sup>齋行されたことが分かる。その祭祀は、標高 243.6m の山頂の西南斜面で、標高 80~90m 付近のやや平坦なところに堆積した巨岩群付近を祭場として執り行われた。祭場は岩上から岩陰、半岩陰・半露天を経て露天へと、四段階の変遷をたどることが確かめられ、周知の事実としてよく知られるところである。このように祭場が変遷した理由について、私見ではあるが、沖ノ島の巨岩群付近での祭祀への参列者もしくは参拝者が時とともに増加したことに伴って、より広い空間を求めて祭場を変えたと考える。

四段階を経て変遷した祭場において、神々に捧げられた奉獻品は、折々の時代性を反映した文物である。その代表的なものをごく一部挙げると、青銅製鏡、金製指輪、金銅製の<sup>りゅうとう</sup>馬具・<sup>ほうしょくぐ</sup>龍頭やミニチュアの<sup>ほうしょくぐ</sup>紡織具、唐・奈良三彩陶器など、新羅・唐からの舶来品を含む、質量ともに一級もしくは超一級の豪華な文物である。それに加えて、<sup>じんぐう</sup>神功皇后の征新羅の役に際しての宗像大神による<sup>しんじょ</sup>神助(『三代実録』<sup>じょうがん</sup>貞観 12 年(870)2 月 15 日の条)や、第 17 次遣唐使の往還の間、宗像社の<sup>どそう</sup>度僧に平穩を祈らせたこと、『続日本後紀』<sup>しよくにほんこうき</sup>承和 5 年(838)の条などの伝承、あるいは記事から見ても、沖ノ島における祭祀はヤマト王権や律令国家が齋行した国家的祭祀であり、北東アジアにおける国際関係の歴史が大



きく係わっていることが浮かび上がってくるといえよう。

すなわち、朝鮮半島南部では、4世紀後半から5世紀初めにかけてのころ、ヤマト王権は新羅へ進出する一方、高句麗の南進に伴い百済が危機を迎えると、ヤマト王権が百済を支援するという緊張状態が生じた。続く5世紀前半には、讚(421)に始まり、5世紀後半の武つまり雄略大王(478)まで、いわゆる「倭の五王」が中国大陸の南朝・宋へ使節を派遣して、後ろ盾を得ようとした。やがて6世紀末から7世紀初めのころ、中国で隋・唐が、また7世紀後半に朝鮮で新羅という統一国家がそれぞれ誕生すると、日本列島の倭は、遣隋使・遣唐使や遣新羅使を派遣して、大陸・半島の先進的な技術・文化の受容に努め、律令国家の形成を成し遂げた。その間に沖ノ島で齋行された祭祀は、航海の安全のみならず、外交交渉の成就や、ときには戦勝も祈願したことであったろう。

## 宗像大社 沖津宮・中津宮・辺津宮

沖ノ島の巨石群周辺において、巨石群を神々が降臨する依り代と見立てて齋行された自然崇拜による祭祀は、『古事記』『日本書紀』の記載内容から推して、8世紀初めまでに、いわゆる宗像三女神むなかたさんじょしんを祭る三宮における信仰、祭祀へと変遷した。つまり、天照大神アマテラスオオミカミと素戔嗚尊スサノオノミコトとの間で交わされた誓約うけいを通して、田心姫神タゴリヒメノカミ・湍津姫神タギツヒメノカミ・市杵島姫神イチキシマヒメノカミの三女神が誕生し、それぞれ沖ノ島の沖津宮・大島の中津宮・田島の辺津宮へつぐうに祭られた。この三女神の信仰の成立は、沖ノ島における露天祭祀の段階であるが、露天祭祀は沖ノ島だけではなく、同時期に大島と田島でも執り行われたことが、大島の御嶽山みたけさん遺跡の発掘と田島の下高宮したたかみやでの遺物採集から判明している。これらの三カ所における共通した奉獻品は、露天祭祀と関連しながら三宮が成立していったことを思わせる。つまり自然崇拜から社殿祭祀に至る信仰の変遷を見ることができるのである。

ここで、沖ノ島の露天祭祀第1号遺跡が注目される。すなわち遺跡の一角において大きな石と、それに続く石列が検出されていて、祭壇を思わせるが、さらに進んで、それを基壇とし、そこに小祠しょうしが設けられていたと考えられないだろうか。というのは、西海道風土記逸文さいかいどうふどきによると、三女神のご神体として、沖

津宮に青蕤(あおに)玉、中津宮に八尺瓊(やさかに)紫玉、また辺津宮に八咫(やた)鏡をそれぞれ納めて祭ったと見える。つまり、それらのご神体を納める小祠が建てられていたと考えるべきであろう。そのような小祠は、その後の建て替えとか改築を繰り返して、現在に見るような立派な社殿へと発展してきたと考える。ちなみに、現在の宗像大社で最古の社殿は、中津宮の本殿で永禄9年(1566)の建造ともいわれるが、確証はない。なお、社殿の焼失と再建に言及した確実な文献史料は、『中右記』<sup>ちゅうゆうき</sup>に見える元永2年(1119)の記事である。

### しんばる ぬやま 新原・奴山古墳群

宗像地域には、ヤマト王権の時代あるいは古墳時代の墳墓が2,800基以上知られる。その中には、宗像地域の首長墓系列に位置づけられ、ごく初期の古墳として、宗像市の徳重本村2号墳<sup>とくしげほんむら</sup>があり、沖ノ島での祭祀が始まる4世紀後半のものに宗像市の東郷高塚古墳がある。続く5,6世紀には、福津市の津屋崎古墳群に中心が移り、7世紀前半から中頃にかけて築造された同じく福津市の宮地嶽古墳<sup>てびかふどう</sup>や手光不動古墳をもって終焉を迎える。

これらの古墳群は、『古事記』に胸形君、『日本書紀』に胸肩君として、それぞれ登場する宗像地域の有力豪族もしくは首長層の築造によることはいうまでもない。その胸形(胸肩)君が沖ノ島における祭祀を直接に司祭したことも、記紀<sup>きき</sup>が伝えるところであり、また、疑う余地がないところである。ちなみに、沖ノ島での祭祀に奉獻された銅鏡・土器などと共通する文物が古墳群に副葬されていて、両者の深い関連性が認められる。言い換えると、祭祀を司祭した胸形君の存在を裏付けるものが古墳群である。そのうち、航海技術に長け、玄界灘を熟知した胸形君の墓域として、海辺に立地し、目の前に大島が見えるところに立地する福津市の新原・奴山古墳群を代表的かつ典型的なものと位置づける。

このように、沖ノ島における古代祭祀を中核として、一方では神社への発展性と、他方では祭祀を直接担った胸形君の古墳群の存在は、全体として、一つの文化を形成するものである。

平成30年7月20日

第52回 福岡県地方史研究協議大会

編集兼発行 福岡県立図書館郷土資料課

